
不思議なハンカチ

麻生佳太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不思議なハンカチ

【Nコード】

N2825Q

【作者名】

麻生佳太

【あらすじ】

何でも消してしまう不思議なハンカチを持つ同級生。自分の失言によって何かが消えてしまう。

（前書き）

ちよつとだけホラー。

「僕、あいつ嫌いだ」

同級生の基^{もとこ}が言うのを意外に思つて、幸雄は動きを止めた。彼の目線の先には、六年五組でリーダー格の男子が談笑している。スポーツは出来るし女の子にはもてる。

ベースボールキャップをいつも被っていた。

イヤツだから、幸雄と基にだって勿論優しいのに。

「あそう、何で？」

あの子の靴、僕は格好が良くって好きだけだな。

その子が履いている靴は、どこか有名なブランドやメーカーのものというわけじゃあないのだけれど、砲丸投げの選手が使うシューズのスタイルだとかいう変わった形の物だ。

それが黄色に塗りたくられてピカピカしている。

その自己主張を思い出して、基は思わず鼻で笑ってしまった。

小学生がするべきお洒落なんかではない。

「だってアイツ、僕の居ないところで悪口言ってるんだもの」

「珍しいね、誰かに言われたくらいじゃ君は信じないだろうに」

基はふてくされたように机にぎゅうぎゅう頭を押し付けて答える。

「…自分で聞いたんだよ」

それを聞いて、イスの背の上でグラグラしていた幸雄は、そいつあ最悪だな、と頷いてから床に飛び降りた。

本当のことを言えば、聞いたのは確かに自分ではあるのだけれど、悪口を言われていたのは幸雄の方だった。

「消えっちまえばいいのに」

「ん？」

振り返って笑う幸雄を見て、基はなんでもないよ、と机に突っ伏した。

「そんなのいいから、ちょこつと見ていてよ」

幸雄は机から、待っててね、とゴソゴソして手を差し出すように基に促す。

億劫に差し出した掌に、コロリとマンゴーの飴がいくつか転がった。

そこに白いハンカチを取り出して被せる。

ポケットから出したはずのそれは、不思議と皺一つ無かった。

見ていてね。

幸雄が目配せする。

ワン

ツー

スリー

パツと取り払われた自分の両手。

何とそこにはもう何も無かった。

タネが分からないのを悔し紛れに、基はへえっと生半可に声を出した。

「…上手いじゃないか」

「練習したもの」

「タネわかんないけどさっきの食べたいから戻して」

「残念、一度消したものは戻せないんだよねー」

ごめんね舌を出されて基は不貞腐れた。

その時はそれだけ。

* * *

幸雄の家は母子家庭だ。

母親が家に戻るのが遅いので、基は夕飯ギリギリまで彼の家で過ごすことが多い。

それか基の家で幸雄も夕飯を食べたりもする。

今日だって、風紀委員会が終わるのを待っつけと言ったのに、机の上には『先に帰る』という走り書き。

基は寒い部屋に一人で幸雄を帰すのが嫌いだった。

自分が悲しくなるからだ。

そついうわけで大急ぎで彼の家に走った。
今日はちよつと文句を言つてからきつと仲直りをして、宿題をして、ゲームして。

オバサンが遅いようなら一緒にご飯を食べて。

「一緒に、一緒に過ごすんだ」

息は切れたけど、アパートが見えたところで明るい気持ちになれた。

でもそれはすぐに奈落に突き落とされる。

彼の家のアパートの、堅い鉄製の扉は開いていた。

それを注意深く開けると、現れたのはあの黄色いシューズだったのだ。

「幸雄」

思わず人の家にも関わらず、靴を放り出して駆け込む。

廊下を歩いてすぐのダイニングに幸雄がぼんやりと立っていて、件の男の子の姿は見えなかった。

「アイツは？無理について来られたのか？」
今便所か？

あんな派手な靴アイツ以外思い当たらない。
基は些か詰め寄るように幸雄ににじり寄る。
机の上には飲みかけのジュースが一つ。
口をつけてない物が一つ。

それと白い布。

そんなわけあるはずはない。

そんなことできるはずがない。

でも基は凄いい勢いでダイニングを抜けて、トイレをノックした。
返事は無く、開けると誰も居なかった。

走って寝室を見、風呂場を覗き、押入れを開ける。
カーテンまで開けたけれど、ベランダにも誰も居なかった。
色づき始めた枯葉が隅の方に溜まっているのが見える。

震える声を、基は絞り出した。

「どこへやった？」

ああ、と幸雄は笑んだまま。

「消してしまったよ」

だって基がさあ、消えればいいって言っただろう？

汗が基の眉間を滑った。

そのまましばらく沈黙してから、唐突に幸雄は笑い出す。

「おつかしーの、基。いくら僕でも人なんて消せないさ」
アイツがここへ来たと思ったかい？

「だつて靴が…」

「羨ましくつて通販で買ったのさつき届いたんだよ」
ジューズはそろそろ君が来るかなあって思つて

口つけてないほうが君の分。

基はヨロヨロとイスにへたり込んでしまう。

「だ、だよなあ、僕、どうかしてた」

本当だよと幸雄がくすりくすり笑うのに、
基も安心して苦笑した。

「まあ、本当に消しちゃったとしても、僕には戻すことが出来ない
のを、君は知っているだろうけれど」

ねえ？

笑った顔が何だか恐ろしく感じて、自分の分のジューズを一気に煽
った。

* * *

でも実際には件のあの子は、次の日から学校には来なかったのだ。
席も空いていて誰に聞いても『そんな子は元より居なかった』と言

う。

代わりにあの黄色い靴を履いて、幸雄がグラウンドに佇んでいた。

そういえばあの日あの時、基は幸雄の家のある一カ所を確認しなかった。

風呂場の、蓋が閉まっていた一人でも入るのが狭いようなあの浴槽の中を、

基は確認するのを怠っていたことに気づいたのは、リビングでベースボールキャップを見つけた時だった。

背後には白いハンカチを持った幸雄が笑っている。

（後書き）

読んで下さり、ありがとうございます。
感想等頂けましたら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2825q/>

不思議なハンカチ

2011年1月26日03時19分発行